
令和4年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業

実施報告書

教職員のいじめの認知力や対応力等の向上、児童生徒の社会性の育成及び学校、家庭、地域におけるいじめ防止の意識の醸成を図ることを目的に指定校が取り組んだ実践をまとめたものです。

＜事業実施校＞

上 越 市 立 牧 小 学 校

妙 高 市 立 妙 高 小 学 校

長 岡 市 立 希 望 が 丘 小 学 校

南 魚 沼 市 立 栃 窪 小 学 校

刈 羽 村 立 刈 羽 小 学 校

村 上 市 立 岩 船 小 学 校

五 泉 市 立 五 泉 南 小 学 校

阿 賀 野 市 立 堀 越 小 学 校

胎 内 市 立 築 地 小 学 校

関 川 村 立 関 川 小 学 校

新潟県教育庁生徒指導課

令和4年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 上越市立牧小学校

1 取組前の課題

全校児童数44名の小規模校である。幼少期から引き続く人間関係の固定化が見られ、友人間でのトラブルがあると解決に時間を要する。また、自分の思いや相手の思いを的確に伝えられなかったり、受け止めることができなかったりして、トラブルに発展する事案が見られる。そのため、縦割り班活動等、異年齢集団での体験的な活動を充実させること、共感的人間関係に基づいた学級づくりを行うこと、自ら意思決定したことを実践させ、児童の自己指導能力を育成することが課題である。

教職員については、予防的指導、成長を促す指導等の積極的な生徒指導がより適切にできるようにするため、スクール・カウンセラー（以下SC）や外部講師を活用した教職員研修を年間通して行うこととした。

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

① 全校プロジェクトアドベンチャー（以下PA）の実施

PAは、様々なアクティビティを通して、信頼関係づくり、人間関係づくりを目指すプログラムである。（一財）プロジェクトアドベンチャー協会（以下PA協会）からファシリテーターを招聘し、全校児童の縦割り班で行う全校PAを通して「人を大切にする力」「自分の考えをもつ力」「チャレンジする力」等の醸成をねらった。6月と10月は対面でPAを行い、8月にはPA協会のファシリテーターとオンラインで教職員がファシリテーターとしてPAを実施した。

(%)

肯定的評価（当てはまる・どちらかと言えばあてはまる）の割合	6月	10月
自分を含めて、友達を大切にしながらいっしょに参加できましたか？	92	100
自分の考えを友達に伝えることができましたか？	77	79

「自分を含めて、友達を大切にしながらいっしょに参加できましたか？」の項目で、数値評価や児童の振り返りから「人を大切にする」当事者意識と相手意識をもちながらPAを楽しんだことがうかがえる。今後も学校の教育活動全体を通じて、自分も相手も大切にするというPAの理念「フルバリュー・コントラクト」に基づいた取組を継続していく必要がある。

② 全国学力・学習状況調査[児童質問紙]の継続調査

(%)

質問事項	4月	7月	10月	12月
難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか。【チャレンジする力】☆	71.4	87.5	84.6	87.5
自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。【自分の考えを持つ力】☆	78.6	92.5	74.3	77.5
自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉で表すことができますか。【自分を表現する力】☆	66.6	67.5	69.2	82.5
人の個性を理解したり、その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか。【人を大切にする力】☆	83.3	92.5	87.2	90.0

全校児童に『身に付けさせたい4つの力』である「チャレンジする力」「自分の考えをもつ力」「自分を表現する力」「人を大切にする力」に関連する質問項目について、調査を4月～12月の毎月実施し、数値評価を行った。「4つの力」に関連する質問項目を重点とし、値をみるとほとんどが肯定的な評価が向上した。特に、「人を大切にする力」に関連する「人の個性を

理解したり、その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか」の質問については、学校の教育活動全体を通して取組を進めたことで子どもたちは日頃から意識していることが数値評価からうかがわれる。また、調査結果を教職員にフィードバックすることにより、調査項目で肯定的な評価が低かった項目に焦点化した学級経営を意識し、主体性と協働性と対話を重視した学級づくりと授業づくりにつながったと考えている。

③ SCによる講話

SCが「SOSの出し方」「ストレスマネジメント」について、全学級で話をした。児童が自分を客観的に振り返ることができたり、新たなストレス解消法を知ることができたりと、学びの多い授業であった。また、SCが全児童、全教職員と相談を実施したことで、SCとの関係づくりや相談環境づくりが進み、SCとの教育相談に訪れる子どもが増えた。

(2) 「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

① 教職員研修（PA研修及びいじめの認知・対応研修）

PA協会ファシリテーターからPAの理念やアクティビティ等の実践を学ぶ研修を6月、8月（オンライン）、10月に実施した。振り返りでは「“いじめの未然防止”に効果的か」「学級経営に生かしたいか」「職能の向上に繋がるか」いずれの設問も肯定的評価は、100%であった。PAのもつ教育効果の理解や自分の学級経営の在り方を見直す機会にもなった。

生活指導主任が中心となり法令理解のためのチェックシート（認知、対応）を用いて、1回目の正答率が100%でなかった「いじめの報告優先」「重大事態理解」「いじめの言葉を使わない指導」「いじめの解消条件」について、いじめ見逃しゼロ強調月間の6月の調査後、研修を行った。法的根拠に基づいて説明したり、児童の心情に寄り添った指導の重要性を説いたりした研修を行った結果、研修直後、またその後の継続調査のいずれでも全項目の正答率が100%であった。

② SCによる教職員研修

SCが「日常生活・教育相談に生かすカウンセリング・スキル」の講義と演習を実施した。教育相談では、子どもの声を受容・傾聴し、相手の立場に寄り添って理解しようとする共感的理解が重要であり、教師にはカウンセリング・スキルの習得は必修である。本研修を通して、「カウンセリングの手法を組み合わせながら子どもの実態に応じた教育相談を行いたい」等の振り返りがされ、教育相談がより丁寧にできるようになったと考えている。

③ 「生徒指導提要」研修

「生徒指導提要の改訂に関する協力者会議」の前委員から提要の第1部「生徒指導の基本的な進め方」を中心の講義を受ける機会を得た。特に、発達支持的生徒指導の場面として特別活動を取り上げ、いじめの未然防止のためにも生徒指導的視点をもちながら「チーム学校」により児童の自己指導能力を育成することの重要性を説かれた。「改訂に直接携わった方からの言葉は重く、生徒指導の実践上の視点を大切にしながら課題予防的生徒指導に心掛けていく」等の声が多数上がり、教職員の心に響いたと感じた。教職員の個々の生徒指導の在り方や考え方を振り返る機会であったとともに、積極的な生徒指導に向けた意識の向上が深められた研修であった。

3 今後の課題

一連の取組や数値評価から課題の解決やいじめの未然防止を進めることができた。しかし、長年に渡り蓄積され固定化された児童の人間関係を見直し、再構築することは容易ではない。本事業を来年度さらにブラッシュアップさせ、一層いじめの未然防止に全校体制で取り組んでいく。

令和4年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 妙高市立妙高小学校

1 取組前の課題

令和2年度から2年間にわたり、学習集団としての規律の乱れや、不登校傾向の児童の増加、特別な支援が必要な児童の人間関係構築の困難さ等の現状があった。その要因として、保育園からの人間関係の固定化やコミュニケーション不足による自己肯定感の低さが考えられる。

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

〔取組〕

① 学級集団づくり・いじめ対策について学ぶ場の設定（6月・8月）

上越教育大学赤坂教授を講師に招き、6月は「いじめを生まない学級集団づくり」、8月は「学校が身に付けておきたいいじめ対策・13の習慣」をテーマに、講演をお聞きした。全校体制で取り組み、担任が変わっても継続できるスキルを子どもたちに身に付けていくことが必要であることを共通認識した。学級担任は、毎回講演から学んだことをもとに今後の取組を決め、学期ごとに振り返りを行うことを積み重ねた。

② 学級経営の方策を話し合う場の設定（8月・1月）

低・中・高学年に分かれ、KPT方式でQ-Uアンケートの結果をもとに2学期と3学期の学級経営の具体的方策について話し合い、取り組んだ。

③ 教職員と児童間のコミュニケーションの場の設定

児童の心の変化の把握といじめの早期発見に向け、毎月の「心のアンケート」の質問項目を、「一番楽しいことは…」「このごろ気になることは…」「クラスみんなは…」に変更した。記述式にしたことで、児童の率直な思いを引き出しやすくなった。配慮を要する記述があった場合には、児童の話を担任がすぐに聞いて対応した。

〔成果〕

○ 新採用A教諭のアンケートの記述から

（8月の講演を聞いて）いじめが起きてしまっても、教師を含むクラス全体で立ち向かっていく力を日々の学級づくりや学校全体の取組で整えておく必要があるのだと思った。
⇒（2学期の取組）子どもたちの人間関係をしっかり構築するということを目的とし学級活動や学級会を行う。
⇒（振り返り）2学期は学級会の前段階のクラス会議に学活等の時間を使って取り組んだ。お題箱にはクラスの良くなってきことが書かれていたこともあり、学級の大切な時間になってきた。

Q-Uアンケートの数値から見ても、A教諭の学級は、不満足群の人数が8人から4人と半減している。クラス会議を重ねることでクラスの課題の解決に全員で取り組み、居心地のよい集団となってきたことの結果であると考えられる。

○学校生活アンケートにおける肯定的評価の数値変化

【児童アンケートから】

「相手の気持ちを考え思いやりのある行動をしています」 肯定的評価 92.6→93.0(%)

「自分には良いところがあると思います」 肯定的評価 85.2→86.0(%)

【保護者アンケートから】

「ご家庭ではお子さんのよいところを認めるなど、肯定的なコミュニケーションを心がけている」 肯定的評価 97.7→99.0(%)

「ご家庭の中で思いやりのある言葉や行動に努めている」 肯定的評価 89.8→96.9(%)

(2) 「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

〔取組〕

① スクールロイヤーによる研修の実施

市のスクールロイヤーを講師に招き、いじめ対応・いじめ予防についての職員研修を実施した。設例をもとに、対応の仕方や留意点について小グループで検討することを通し、いじめを把握した場合の対応について具体的に学んだ。また、いじめの定義や予防の重要性等についても講義を通して学んだ。

② 担任一人が悩まない体制づくり

日頃から些細なことでも相談できる雰囲気をつくることに加え、トラブル発生時にはケース会議を開き、チームで対応する体制を整えた。ケース会議において対応策をチームで検討することを通し、経験の浅い教職員のいじめ対応力の向上を図った。

〔成果〕

○ 採用5年目B教諭のアンケート記述から

いじめ事案が起きたとき、担任である自分がもっと動かなければいけないと思っていた。だが、加害者、被害者、それぞれの保護者、周囲の児童など、複数への対応が必要になる。対応も複数で行うことが大切だと分かった。被害者だけでなく、加害者の気持ちを知ること、保護者同士の関係に配慮して対応することなど、様々な面に配慮して対応していかなければならないことを学んだ。

3 今後の課題

本事業を通し、いじめ未然防止に向けて、安定した学級集団づくりに学校全体で取り組むという共通認識をもって取り組んできたが、まだ児童のコミュニケーション力についての課題が残る。次年度は、グランドデザインの土台を「一人一人に安心感・自己存在感のある学級・学校」とし、よりよくかかわる力の育成に向けた全校SSE、クラス会議やクラスイベントを通した他者理解・共同体意識の育み、プロジェクト活動による主体性の育成等を行っていく。これらの取組を継続し、児童の自己肯定感を高めることにより、いじめを未然に防止していく。

1 取組前の課題

(1) 実態

休み時間には体育館やグラウンドで体を動かして遊んでいるなど、明るく元気のよい児童が多い。また、清掃や遊び、学校行事などで異学年交流を定期的に行うことで、様々な場面においてだれとでも楽しく過ごす姿が多く見られるようになってきている。

一方で、相手に暴言を吐いたり手を出してしまったりするなど、仲間の気持ちを汲みとることができずにトラブルに発展したり、集団生活を行うことが苦手で、不適応を起こしてしまったりする様子が見られる。

(2) 課題

- ① 自分の気持ちをコントロールしながら、集団に適応する力の育成
- ② 互いに思いやり、仲間と協力し合う力の育成

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

今年度の7月より、全校一斉でのソーシャルスキルトレーニングに取り組んでいる。テーマは、「あいさつ」「温かい言葉」「話の聞き方」の3つに絞り、以下のような流れで行った。

- ①【学び】教職員が出演する動画を視聴し、3つのテーマにおける望ましい姿、望ましくない姿とその理由を学ぶ。
- ②【実践】学級で望ましい姿を実践してみる。
- ③【評価】2週間、毎日学級で1日の生活を振り返り、自己評価する。（その期間、毎日各学級の評価を放送で周知する。）

この取組を行ったことで、1年生は、自分から明るいあいさつをできるようになった。5年生は、学校のあいさつをもっとよくしたいと思い、国語の学習で上記と同様の活動を自ら計画する姿が見られた。望ましい姿を学び、実践し、継続的に評価することで、相手との望ましい関わり方を知り、身に付けようとする言動が多く見られた。

令和4年8月3日（水）に中越教育事務所 指導主事 佐藤 典人様を招聘し、「Q-Uの活用と分析の研修」を、また、令和5年1月6日（金）に「学校適応度感尺度アセスの活用と分析の研修」を行った。研修では、Q-Uやアセスの結果をもとに、それぞれの児童の特性、個別の配慮事項について共有した。教職員からは、「自分の見取りとの乖離がある児童がいたことが分かり、個別に配慮していこうと思った」「学級の傾向が分かったため、学習規律や仲間づくりなど、どこに重点を入れて取り組むか考える参考になった」など、児童一人一人や学級への理解が深めることができた。

令和5年1月19日（木）に、生活指導主任が「魅力ある学校づくり調査研究事業（国立教育政策研究所委託）」を行っている横須賀市に視察に行った。横須賀市では、魅力ある学校づくりを「居場所づくり」「絆づくり」に重点を置いて取り組むことにより、「個々の自立支援」と「集団の力の向上」の両輪でいじめ・不登校の未然防止をねらい、以下のように取り組んでいる。

- ①学年集団の実態に合わせた経営方針（魅力ある学校づくり 引継ぎシート）の作成
- ②年3回、教師の手立ての有効性の予想と児童の実態調査をもとにした分析
- ③小～中学校9年間での継続的な引継ぎ

先進校の取組を職員研修で共有することで、学校全体として、「居場所づくり」「絆づくり」の視点をもち、互いに思いやり、仲間と協力し合う力を育成できるようにする。

(2) 「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

令和4年8月22日(月)にスクールカウンセラー 木澤 弘様を講師に、「いじめの認知力、対応力向上の研修」を行った。研修では、具体的ないじめの事例をもとに認知や初期対応についていじめの法令を照らし合わせながら学んだ。教職員を対象にした「正しい『いじめ』の認知のためのチェックリスト」内の「教職員は、児童生徒からいじめにかかる相談を受けたら、その教職員がすぐに加害と思われる児童生徒に聞き取りを行うなどの事実確認を行った上で、いじめ対策組織（いじめ対策推進教員やいじめ担当の教員、管理職等）に報告を行うことになっている」の項目では、研修前の正答率が70%であったのに対し、研修後には100%になり、教職員のいじめの法令理解度が向上した。研修後には、いじめ行為やいじめ類似行為、いじめの疑いを把握した場合に、生活指導主任または管理職に迅速に報告し、情報共有しながら組織的に対応することができるようになり、教職員の対応力向上につながった。

3 今後の課題

本年度の児童アンケートの中の「学校が楽しい」「他の人に嫌なことをされない」「周りの人からあったか言葉をかけてもらった」の項目を7月と12月とで比較すると、下記の2項目で上昇が見られた。(表1)

表1 児童アンケートの比較

(人)

項目	月	4 とても そう思う	3 だいたい そう思う	2 あまりそう 思わない	1 まったく 思わない	平均	比較
学校が楽しい	7月	191	106	34	8	3.4	+0.1
	12月	211	88	28	6	3.5	
他の人に嫌なことをされない	7月	127	115	59	39	3.0	+0.3
	12月	179	87	51	16	3.3	
友達に温かい言葉をかけてもらった	7月	186	100	46	8	3.4	0
	12月	196	95	28	14	3.4	

結果は、おおむね肯定的評価の割合が増えているが、否定的評価の「1」をつけている児童も少なからずいる。今年度「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q U」「学校適応感尺度アセス」を実施した。これらを活用し、上記児童アンケートで否定的評価をしている児童について、どのような理由でそう感じているのか見立てながら指導を展開していく必要がある。そして、否定的評価をしている児童へ具体的に支援したり、活躍する場を設定したりするなどしていくことが必要であると考えます。

学校名 南魚沼市立栃窪小学校

1 取組前の課題

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、この2年間、学校と地域とのつながりは薄れ、子どもたちは、校内の友達と教職員との関わりを中心に学校生活を送ってきた。小規模校であるがゆえに、子どもたちには多くの人との出会いの場をつくり、関わりをもたせることで多様な考え方や生き方を学ばせることが重要であるが、それができない状況が続いていた。

子どもたちは、学習や遊びの中で、意見の相違で嫌な思いをすることはあっても、人間関係を悪くしたくないという思いが無意識のうちにはたらい、自分の思いを相手に伝えることなく胸の内に留め、ストレスをためてしまう子どももいる。他者に自分の思いをうまく伝えるスキルを身に付けさせ、ストレスを抱え込まないようにする指導や支援が必要である。

また、子どもに寄り添い、内面を引き出すための、教職員の対話力や指導力が求められる。

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

【取組】

- ① 世の中には、自分とは違った見方や考え方、生き方をする人がたくさんいることを知り、それを受容し、共生していくことの大切さを、子どもたちに感じさせたいと考えていた。また、命の大切さを頭では理解しているが、より実感として捉えさせたいという願いをもっていた。そこで、講師を迎えて講演会を2回開催した。
 - 世界各地を巡ってきた冒険家の高野 孝子様（NPO 法人 ECOPLUS 代表理事、立教大学准教授）を講師に迎え、「世界各地を訪れて感じたこと」を演題に、世界の教育事情や生活状況等の話を聞いた。実施後の子どもたちの感想の中には、次のようなものがあった。
 - ・ 勉強が嫌になったり、友達とけんかしたりしたときは、学校へ行きたくないと思うこともあるけれど、学校に行きたくても行けない子が世界の中にはいることを知りました。学校に毎日行ける自分は幸せなのだと思います。
 - ・ 世界には、いろんな国があることを知りました。日本の当たり前は、世界に出ると当たり前ではないことがあることも知りました。もっともっと、世界のことを勉強したいと思いました。
 - 東日本大震災のボランティア活動を長く続けてきた倉田 智浩様（一般社団法人愛・南魚沼みらい塾理事）を講師に迎え、「越後 愛 届け隊の活動を通して感じた命」を演題に、「命」の授業を実施した。実施後の子どもたちの感想の中には、次のようなものがあった。
 - ・ あの災害で、家族を亡くしてしまった子がたくさんいたことを知りました。そんな子も、人に支えられながら、自分の人生を歩み、亡くなった家族の分まで生きていこうと頑張っていることを知りました。嫌なことがあると、いじけたり、人のせいになしたりして、嫌なことから逃げてしまう自分は心の弱い人間だと思います。
 - ・ 人は、たくさんの人に支えられながら生きていることを改めて感じました。そして、自分の命は、自分だけのものではないことも知りました。だから、自分の命も人の命も大切にしなければならないと思いました。
- ② いじめ防止の意識を高めるために、標語を募集した。児童、保護者、地域住民から 34 作品の応募があり、その中から、子どもの作品「消えないよ 心の傷はいつまでも」が最優秀賞に選ばれた。看板にして体育館に掲示することで、子どもたちの見る機会が増え、いじめ防止の意識の継続を図っている。

【成果】 児童の7月と12月の学校生活アンケートは以下のとおりとなった。

アンケート項目	肯定評価 (%)	
	7月	12月
楽しく学校に通っていますか。	86	93
学校生活の中で困ったことや不安なことはありますか。	71	86
友達に優しくしたり、仲良くしたりしていますか。	86	93

年度当初から、「言葉遣い」、「気持ちの伝え方」、「自他を大切にする気持ち」を意識させてきた。今年度、2回の講演会と標語募集の取組を通して、これまで以上に友達への言葉遣いや声のかけ方に気を付ける子どもが増えた。学校生活に対する満足度がアップしたこともその成果と言える。

(2)「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

【取組】 子どもの心に寄り添った指導ができるように、小出 武幸様（中学校区のスクールカウンセラー）を講師に迎え、「子どもの話に傾聴する聞き方」をテーマに、初級カウンセリング研修を行った。実施後の教職員の感想には、次のようなものがあった。

- 「子どもをよくしたい」、「子どもの力を伸ばしたい」という意識が強すぎて、知らず知らずのうちに上から目線で子どもに相對していたと反省しています。自分にも子どもの時代があり、子どもの頃に先生や学校に対してマイナスイメージをもつことがあったのに、今、教師となり、すっかりそのことを忘れていました。「これくらいできるよね」とか、「そんなことも分からないの？」など、無意識のうちに子どもの心を傷つける言動をとっていた自分がいたことを反省しています。
- まだまだ未熟で、子どもに寄り添った指導を十分にできる自信はありませんが、そう思いながら子どもと接していくことが重要であり、それが子どもと接する際の第一歩なのだと思います。

【成果】 学校評価アンケートの教職員評価の結果は以下のとおりである。

アンケート項目	肯定評価 (%)	
	7月	12月
いじめや暴力行為に早期対応できていたか。	75	100
児童の理解に努めていたか。	63	100

後期の学校評価では、全教職員がアンケート項目に対して肯定的に自己評価していた。カウンセリング研修で、子どもの言動に対する見方や捉え方の留意点や接し方を学び、自らの言動を見つめ直して、子どもたちの指導や支援に生かしていた。

3 今後の課題

講演会後の感想やいじめ防止標語への参加意欲、学校評価アンケートの結果から、子どもたちのいじめに対する意識は高まった。それ以前も、子どもたちは、「いじめはよくないこと」と頭の中では捉えていたが、今年度の取組を通して、その思いは更に強まった。

また、日々の学習や生活の中での話合いや、関わり合いの様子から、自分とは違う見方や考え方を尊重する言動が見られるようになった。子どもたちの物事を見る目が広がったと考える。

しかし、へき地校かつ小規模校であるがゆえの人との出会いの少なさや、限られた人間関係の中での学校生活は続く。それだけに、学校として、意図的に「人・もの・こと」との出会いの場をつくり、そこから学ぶ経験を積み重ねさせていく努力は今後も必要である。

また、子どもの数が少ないという現実があり、固定化された人間関係の解消は難しい。気を遣って本音をぶつけられない子どもが依然としているという課題は残っている。自分の思いを正直に相手に伝えるときの話し方や、相手の考え方を認め、共生していこうとする対話力を身に付けさせるための指導を今後も継続していかなければならない。

1 取組前の課題

人間関係の固定化により、特定の児童がからかいの対象になったり、仲間外しをしたりする問題が起こっている。また、コミュニケーション不足による誤解からトラブルに発展する実態がある。これらの課題解決に向け、教職員の児童理解や対応力を高めていくとともに、未然防止や課題解決のための体制づくりを強化していく。

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

- ・ Q-U及びSCTアンケートの実施

Q-Uアンケート	6月	12月
学校生活満足群	57.6%	55.7%

当校では、年2回6月と12月にQ-Uを実施している。Q-Uは、学級における児童の満足度を理解したり、学級経営にいかしたりしている。また分析結果をもとに、児童の人間関係を把握したり、いじめの未然防止の資料として役立てたりしている。12月に行った2回目の結果は、6月の1回目よりも満足群の割合はやや下がったが、教職員が一人一人の困り感に寄り添おうとする姿勢が高まった。学級担任がクラスの中で、いじめを許さない姿勢を伝え続けてきたことで、児童同士で注意し合ったり、かかわり方に気を配ったりする様子が見られるようになった。

また、これまで当たり前のように実施していた学校生活アンケートとは別に、講師から提案していただいた「SCTアンケート」を年2回実施した。このアンケートは、5つの刺激文から、児童の深層心理に迫ることができ、見守りの必要な児童を把握することができた。質問事項は、低・中・高学年に分かれて相談しながら決め、児童のアンケートの回答を多くの職員で分析した。

低学年	中学年	高学年
①1つだけ願いがかなうなら	①私が一番楽しいのは	①最近
②友達といると	②学校でほっとする場所は	②学校でほっとできる場所は
③このごろ気になるのは	③クラスみんなといると	③クラスにいます
④私のことを分かってくれるのは	④1つだけ願いがかなうなら	④家にいます
⑤一番楽しいときは	⑤私のことを分かってくれるのは	⑤私のことを分かってくれるのは

記述された言葉だけでなく、筆圧や字の大きさ、書き方など、多面的・多角的に文章を読み取り、分析した。講師の方から教えていただいた記述の読み取り方を参考に、児童の内面に迫る分析をしたことで、これまで見ていた児童の姿とは、また違った角度から児童理解を深めることができた。SCTアンケートの分析をもとにした研修会を通して、教職員の児童への言葉かけや支援の仕方等に変化が見られた。児童同士による大きなトラブルや重大ないじめの事案の発生はなく、児童が安心して学校生活を送っている。

(2)「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

- いじめ認知件数の変化 (件)

令和3年度		令和4年度	
前期（4～10月）	後期（11～3月）	前期（4～10月）	後期（11～3月）
11	6	7	1

令和3年度のいじめ認知件数は17件であった。その多くは、保護者や被害児童からの訴えにより発見された。令和4年度のいじめ認知件数は、2月現在で8件である。依然として、保護者や被害児童からの訴えによる発見が多いが、中には教職員による発見もあり、担任が学級での様子や児童同士のかかわり方の異変に気づき、いじめが重大な事態になる前に対処できたものが多い。週1回の児童理解の会で、全教職員で共通理解を図ったことや些細なことでも気になることがあった際は、保護者へ伝え、家庭での見守りを依頼したこと、児童のトラブルがあった時には、いじめ対策委員会で素早く情報共有を図ってきたことで、組織として対応することができた。また、研修を通して、教職員のいじめに対する感覚が敏感になってきたことを実感している。

- 法令理解の自己点検 正しい「いじめ」対応のためのチェックリストによる数値変化

今年度、職員対象に実施した正しい「いじめ」対応のためのチェックリストで、前期では、全問正解した職員の割合は90%であった。特に、「4 児童生徒からいじめの相談を受けた時、まずその教職員が加害と思われる児童生徒に聞き取りを行うなど事実確認を行った後で、報告し、対応を続ける」の項目において、正しいと判断する教職員が数名いた。法令理解のためのミニ研修会の実施や、職員会議等で正しい「いじめ」対応のチェックリストによる研修を積み重ねてきた。また、いじめと疑われる事案が発生した際も、一人で対応せず、必ず報告し、役割分担をして複数で話を聞き取るなど、多くの職員で対応にあたることができた。後期に実施した同様のアンケートでは、全問正解した職員の割合は、93%であった。研修を重ねることで、いじめへの対応を正しい理解が進み、「個人ではなく、組織で対応する」認識が深まった。

3 今後の課題

今年度の取組により、アンケートを通して児童理解を深めることや、トラブルが起こった際には、複数で役割分担をして、組織で対応することが実行できた。特に、今回実施したSCTアンケートにより、児童の内面にある思いや変化に気づき、どのように支援していけばよいのか、全教職員で共通理解を図ることができた。今後は、教職員のアンケートの分析力をさらに高めていく必要がある。また、学校生活アンケートとSCTアンケートを2本立てで実施したが、今後、アンケートの精選や教育相談の位置付けについて、年間を通して計画的な実施を図っていく。

毎年入れ替わる教職員のアンケートの分析力を維持・向上させていくことや、いじめの事案が発生した時に、組織で対応できる体制を強化していくことが求められる。今後も研修を積み重ねていく。

1 取組前の課題

昨年度実施した「ソーシャルスキル集会」や「ほめ言葉月間」の取組により、児童はよりよい人間関係を構築する上で大切な「互いの個性を認め合う」意識や気持ちを身に付けることができた。しかし、活動中や活動直後の気持ちが持続せず、時間の経過とともに、その意識や気持ちが薄れていた。そこで、マンネリ化しないよう工夫した取組が求められる。

また、年2回実施した「文章完成法アンケート（SCT）」と「ハイパーQ-U検査」の結果から、潜在的な悩みを抱えた児童がいることが分かったため、このような児童を早期に発見し丁寧に対応していくことが必要である。

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

- ① 互いの個性を認め合う気持ちや意識を持続させるために、3つの取組を行った。まず、「全校ソーシャルスキル集会」では、児童が相手とのコミュニケーションを上手にとるための題材を取り上げた。そして、「いじめ見逃しゼロ強調月間」では、学級単位と縦割り班単位で、一人の児童のよさをみんなで賞賛し合う「ほめほめタイム」を昨年度に引き続き全校で取り組んだ。また、縦割り班を活用した構成的グループエンカウンター「ふれあいタイム」を学期ごとに実施した。



- ② 「全校ソーシャルスキル集会」では、友達を遊びに誘ったり、失敗した友達を励ます場面などを想定した実演を見た後で考えたことを交流することにより、「自分がうれしいと感じる対応をすることが大切だ」と事後の感想に書く子が多く見られた。また、全校ふれあいタイムでは、簡単なゲームを通して、異学年間での交流をすることができたため、「同じお題でも人によって考えが違ふ」という気づきが得られた。



児童の学校生活アンケートでは、「自分にはいいところがあると思う」という自己肯定感の調査の数値が7月に80.0%、12月には82.5%と8割以上が継続している。また、年2回実施したハイパーQ-U検査の結果を比較すると、学校生活満足群について、6学年中5学年が第1回（6月実施）より第2回（11月実施）の結果に向上が見られた。全校で取り組んだ「ほめほめタイム」を通して、児童が互いに認め合うという気持ちや意識が少しずつ高まっていると考える。

(2) 「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

- ① 3つの取組について

教職員が悩みを抱えた児童を早期に発見し、いじめを認知したり、その後の対応につなげるために、以下の3つの取組を行った。[1]いじめに関する児童のアンケートは、事後に必ず児童との面談を実施し、具体的な状況を把握し、対応策を複数の職員で検討した。[2]

外部講師を招聘し、学級経営力の向上に関わる研修や、「ハイパーQ-U検査結果の分析や研修」を実施し、「居心地のいい学級経営のあり方」を学ぶ機会を得た。[3]「文章完成法アンケート (SCT)」をして、潜在的な悩みを抱えた児童の早期発見に努めた。

② 取組による成果

[1]アンケート後の児童との面談することで、大きな問題になる前に児童の思いを受け止めることができた。その結果、職員アンケートで「早期に対応し、いじめを未然防止に取り組んだ」という項目は、肯定的評価が100%だった。[2]学級経営においては研修での学びをいかし「担任の捉えと児童の感じ方のズレ」を意識して児童と関わることもできた。学級のシステムや手順を明確にして、あたたかい雰囲気の中で過ごせる環境を作っていく必要性を職員が感じ取り、実践に生かそうとする姿が多く見られた。[3]「文章完成法アンケート (SCT)」では、児童の表面には見えない部分に気付くきっかけになり、2回目のアンケートは職員自らが分析を実施することで、記入した意見を分類しながら児童の気持ちを考える機会をもつことができた。

〔 実施した「文章完成法アンケート」 〕		
(1・2年)	(3・4年)	(5・6年)
〇じぶんのここに ぴったりな ことを () に かきましょう。 ・おうちのひとに はなすなら、 「きょう がっこうでね、 [] 。」 ・がっこうで ほっとするばしょは、 [] です。 ・じぶんのはなしを よく きいてくれるひとは、 [] です。 ・ともだちと いると、 [] きもち です。 ・ともだちは わたし(ぼく)のことを、 [] とおもっ ていると おもいます。	◎次の()に当てはまる言葉を入れて完成させてください。 ① わたしが1番楽しいのは、 () ② 1つだけねがいごとがかうなら () ③ わたしのことを分かってくれるのは、 () ④ 友だちといっしょにいと () ⑤ このごろ気になることは、 ()	〇次の()に適当な言葉を入れて文を完成させてください。 1 一つだけ願いがかなうなら () 2 クラスにいと () 3 このごろ気になるのは () 4 私のことを分かってくれるのは () 5 先生にほめられたのは ()

3 今後の課題

今年度の取組を通して、児童が友達のよさを認め合うことで、本校の課題であった自己肯定感の低さは少しずつ改善されてきた。また、研修を通して、職員は、児童一人一人の毎日の生活での見取りを大切にして、いじめを未然に防止していく必要があるという意識が高まってきた。

しかし、児童アンケートの「困ったり悩んだりしたとき、誰かに話すことができたか」という項目で肯定的評価をした子どもが78%だったことから、全校の2割以上の子が自分の悩みを伝えていないことが分かった。毎月のアンケートで、友達との関係について聞き取りをしているが、そこでは表出できない子どもも必ずいる。話しやすい雰囲気づくりをするとともに、SOSの出し方を指導するなど、悩みを一人で抱えないような働きかけが必要である。また、友達の何気ない言葉で傷ついたという訴えも多く見られるため、道徳の授業などで、人との関わり方やコミュニケーションスキルを高める指導を取り入れたり、相手を思いやる言葉の大切さを指導したりして、引き続き取り組んでいく。

学校名 五泉市立五泉南小学校

1 取組前の課題

毎月の学校生活アンケートで平均 20 件ほどのいじめ事案が挙がる。第6学年では、令和3年度末には他校児童とも関係するSNSでのトラブルが1件起きた。相手が嫌な思いをする言葉からいじめにつながるが多いため、優しい言葉遣いを重点取組の1つとし全職員で指導に当たっている。また、児童発案のいじめ見逃しゼロスクール集会も実施しているが、その内容や質的な充実度を上げてより効果を高める取組が必要と捉えている。

また、SNSやゲームを介した問題について、児童と話し合ってルールを決め、端末をきちんと管理できる家庭を増やすため、保護者に対して継続した啓発を行っている。

このような実態から、「よりよい人への接し方や声のかけ方等のコミュニケーション能力の育成」を課題とし、温かく優しい言葉で交流する児童の姿を目指して取組を進めた。

2 特に成果が見られた取組の具体

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果（児童アンケートによる分析）

① 講師を招聘し、「言葉の功罪を含めたSNSネットトラブル防止学習」を実施

第6学年へのアンケートでは、「自分の携帯電話（スマホ含む）を持っていますか」で67% 持っていると回答し、スマホ以外のネット接続機器についても88%が持っていると答えている。また、「ネットやSNSを何らかで利用している」とした児童は77%であり、「夜遅くまでインターネットを使用している」児童は32%であった。ネットツールが児童の生活に深く浸透していることと、トラブルが発生しやすくなる温床がある実態を把握した。

そこで、SNSやネットトラブル防止に関する正しい知識理解が、望ましいコミュニケーション力を育むと捉え、気になる実態率が高い高学年を対象に、専門講師を招いた学習会を実施した。学習会では、一般財団法人インターネット協会アドバイザー・大久保真紀様による正しい利用方法やメディアの功罪・付き合い方について、児童に分かりやすく講話頂き、質問タイムを取って児童の疑問や不安に答えて頂いた。実施後のアンケートでは、「利用する際の参考になった」「言葉の良さと怖さが分かった」とする児童が94%となり、啓発効果の高さが伺えた。

また、年間3回、中学校区で連携してパワーアップ週間を実施し、家庭学習時間と共にメディアの利用時間や内容について、保護者と共に見直す取組として、児童と保護者がメディア使用ルール等を設定し、期間中の取組をカードに記録した。保護者の一言コメントでは、児童の意識及び保護者の関心を高め、効果を認めることが伺える記述が90%を越えた。

《児童の声》・ ネットトラブル防止学習で自分のメディア使用時間が多いのを知って、メディアのことを気にするようになった。

② 児童発の「いじめ見逃しゼロスクール集会」の取組改善

いじめについて考える時間を通して、いじめを絶対に許さない、見逃さないという心情を育てることと、集会の企画運営を児童が行う活動を通して、いじめを生まない主体者は自分たちであり、自分たちがいじめを見逃さない運動の先頭に立つという意識を持たせることをねらい、標記の集会を11月に実施した。問題場面を設定し、優しい言葉のかけ方にテーマを絞り行った。

実施内容は次の通り：【事前】①児童企画委員会が教員に向けて「本校で無くしたいいじめ」アンケートを実施する、②児童企画委員会がアンケート結果と自分たちが普段感じるいじめの実態をもとに、「低・中・高学年別の問題提起動画」を作成する、③動画の最後に「あなたはどうしますか」と問い、各クラス内で意見を出し合い、「クラスの行動宣言」を決める。【当日】①全校が集まり、1～6年各クラスの代表者が行動宣言を発表する、②問題提起動画の続きとして、人への良い接し方例を流す、③児童企画委員会が考え作成した「南小のいじめ防止3箇条」を提案し、全校児童に実施を呼びかける。（1：いろいろな人に声をかけます、2：自分の発言に責任を持ちます、3：相手の立場に立って考えます、の3箇条。校

内の廊下を含む各所に掲示)【事後】①各クラスで一連の取組をふり返り、各自が自分の意識の変容やこれから自分が頑張っていきたい決意を「ふり返しシート」に書き、廊下に掲示する。

実施後1か月の時間を置いて、効果の浸透度・持続度をみるため行った児童アンケートでは、①学級ごとの話し合いの意義があったとした児童が79%、②全校で集まり行動宣言した意義の効果は78%、③いじめ防止への意識や自分の行動変容があったとした児童は88%となった。

《児童の声》・ 学級や全校でいじめに向き合い、みんなでいじめを許さないと考えることができたので、良かったと思います。・いじめについて、許さない許せない気持ちが前よりもより強くなりました。・集会をしていじめはダメだという気持ちが強くなったし、クラスのみんなの表情や空気も明るくなったと思います。
・ 今までいじめをしていないから自分は関係ないと思っていたけれど、この集会で、見て見ぬふりをしている傍観者を止めなければいけないと気づけて、いじめを見たら止められるようになりたいと思いました。・私は、集会があった後から、他の人にあいさつしたり、違う友達に声をかけたりするなどしてとても意識しました。周りのお友達と仲良くするというのは、とても楽しいです。
…これらの声から、「優しい声かけや温かな挨拶」をし合う意識が高揚し、行動変容につながったことが成果である。

③ 人権強調月間で全学級が「言葉や態度による差別やいじめについて考え合う授業」を実施
12月には人権強調月間を受け、全学級で差別やいじめに係る授業を実施し、児童の意見交流や話し合いが真剣に行われた。実施後の児童アンケートでは、「人権や差別・いじめについて考え合う授業の意義があった」とする児童は83%、「差別やいじめを許さない気持ちが高まった」とする児童は95%と非常に高くなった。

《児童の声》・ 人権学習で自分が変わった。女なのに男の服を着て、おしゃれに興味がなく、女らしくないのかと思っていたが、変わった。自分がそう思っていてそうしたいからしてるだけと、自分に自信が持てた。・前よりもいじめを許さないという気持ちが強くなり、見たら止めようという気持ちも強くなりました。
・ ただでさえ、いじめをされる物語を見たり聞いたりするだけで泣きそうになるから、こんな悲しみをたくさんの人たちに伝染させたくないと強く思いました。

(2) 「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

一般財団法人インターネット協会アドバイザー・大久保真紀様を講師にお迎えし、児童のSNSネットトラブル防止学習の後、教職員にもSNSネットトラブル防止講座を職員研修として実施した。実際のSNS画面を提示しながら教えていただき、トラブルの入り口となるサイトへのアクセスが容易にできてしまうことを実際に見せて頂いたことで、スマートフォンやタブレット、ゲーム依存・動画依存の実態と恐さについて質疑を交えて認識を深めることができた。また、「いじめとは何か」という現在の法令の正しい理解のため、生活指導部が実施したアンケートでも、県いじめ対応総合マニュアルチェックシートの数値が5%以上向上する変化が見られ、職員のいじめに対する意識や理解が深まった。このことで、児童の微妙な表情や変化を捉えて声をかけ、いじめを早期に認知する能力や、学年や担当、管理職に即時報告し組織で対応する力が高まったと考えられる。

3 今後の課題

児童の思いや本音、記述を重視し、「優しい言葉」を発信する取組や言葉のかけ方についての取組を進めてきた。取組の肯定評価は高かったが、次のような一部児童の記述も上がっている。

○ 全校でいじめのことを考えられたので良かったです。今度は、行動に表せる週間があるといいと思う。

○ クラス単位ではなく、個人の方がもっとよく考えられるのではないかと思った。

児童は全体の大きな場での取組後の振り返りで、クラスでのじっくりとした深い話し合いや個別に考えを深めることに、一層意義があると感じている。全校集会活動には、行動変容を促すためのより効果的な児童発案の工夫を加えて改善し、今後も全校体制での継続的な取組を進めていく。

1 取組前の課題

- ・ 来年度、分田小学校との統合を控え、新しい友だちと良好な関係を築けるよう、他者に対して思いやりの心をもつ。
- ・ インターネット利用に関する児童と保護者、職員の理解を深め、正しく利用する力を高めることにより、ネットいじめの未然防止を図る。

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

取組① 「いじめ見逃しゼロ集会」



「いじめをしない！させない！見逃さない！」

・児童会が主体となり、縦割り班で友達のよさを伝え合う活動を計画し、いじめ見逃しゼロ集会を行った。最後に、全校児童が「誓いの宣言」を唱和し、自分たちでいじめを防ごうとする意識を高めることができた。

成果①

○児童アンケート【肯定的評価の割合】

(単位：％ 増減：p)

	学校が楽しい			自分のよさを見付けた			友達のよさを見付けた		
	1学期末	2学期末	増減	1学期末	2学期末	増減	1学期末	2学期末	増減
R 3	91.7	93.4	+1.7	86.8	90.2	+3.4	91.7	95.9	+4.2
R 4	92.8	88.3	-4.5	88.0	90.0	+2.0	95.2	92.5	-2.7

- ・ ほとんどの児童が「学校が楽しい」と感じている。友達関係が良好であることが、その要因の一つとして挙げられる。ただし、今年度の下降した要因を分析する必要がある。
- ・ 友達の良さを見付けて伝えることにより、自分のよさに気付くことができ、自己肯定感を高めることができた。

○Q-Uの調査分析

(単位：％ 増減：p)

	学校生活満足群			非承認群			侵害行為認知群			学級生活不満足群		
	5月	10月	増減	5月	10月	増減	5月	10月	増減	5月	10月	増減
R 3	87.0	89.7	+2.7	9.3	8.5	-0.8	1.8	0.0	-1.8	1.8	1.8	±0.0
R 4	89.5	89.2	-0.3	6.5	8.3	+1.8	1.6	0.0	-1.6	2.4	2.5	+0.1

- ・ 学校生活満足群の割合がやや減少したが、高い水準を維持している。職員研修による意識改革や対応策を検討したことにより、児童同士が互いのよさやがんばりを認め合い、支え合う学級・学校風土づくりが進んでいる。
- ・ 非承認群の増加等、学年単位の詳細な分析をもとに、効果的な指導を追究する。

取組② 「インターネット教室」

講師 インターネット利用アドバイザー 大久保真紀 様
(親子対象2回、児童対象2回)

成果②

○児童の感想

- ・ インターネットは世界中とつながっていて、オンラインと一緒にやっている人の顔が見えないので、悪口を言われても誰がやったのかが分からなく、こわいと思いました。困ったことがあったらすぐに大人に伝えたいです。

○保護者の感想

- ・ 成長に伴い、大人の目が届かないことも多くなりますが、特にインターネットをどのように使っているかよく話し合っておかないと、危険もすぐそこに存在するのだと思いました。子どもたちが自分で使いこなせるよう教えていくのはもちろんのこと、大人も手本となる使い方ができるよう気を付けます。

○効果

- ・ インターネットは便利であるが危険な面もあることを知り、相手の立場を思いやり、いじめにつながらないように正しく使うことの大切さを学んだ。
- ・ 保護者が児童と一緒にインターネット教室に参加することにより、保護者の意識を高めることができた。また、児童と講演内容を共有することで、保護者と児童が話し合い、家庭の教育力を高めることにも有効であった。



(2)「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

取組① 「職員研修：いじめの芽をつむ温かくて強い学級をつくる②」

講 師 新潟薬科大学 非常勤講師 橋本 定男 様

成果①

○職員の感想

- ・ いじめが起きないような学級づくりの方向を示していただきました。4月から楽しいことばかりやって一人一人を褒めていたはずなのに、トラブルが多発してしまうのはなぜなのかははっきりしました。学級経営で足りていなかった部分を意識して、明日から子どもたちと関わっていこうと思います。



○いじめ認知件数

	令和2年度	令和3年度	令和4年度(12月現在)
いじめ認知件数	24件	30件	39件
いじめ解消率(3か月後)	100%	100%	100%
教職員のいじめ発見率	8%(2/24件)	50%(15/30件)	54%(21/39件)

- ・ いじめの認知件数は増加傾向にあるが、それだけ教職員や児童が「いじめを見逃さない」という意識が高まっている。教職員のいじめ発見率の上昇もその現れである。
- ・ 認知したいじめ事案を適切に指導した結果、すべてのいじめ事案は3か月経過後に解消している。

3 今後の課題

児童は、いじめはよくないことを十分に理解している。しかし、現実にはいじめ事案は発生している。その中で大切なことは、周囲の大人がいじめに対する意識を高めることである。どれだけ未然防止できるか、早期発見できるかである。今年度も、職員研修や親子インターネット教室で外部講師を招聘し、いじめ未然防止のための意識改革を推進した結果、成果は十分にあり目的は達成されたと考える。

今後もこの成果を引き継ぎ、いじめ未然防止の意識をもち続けるため、さらに今年度同様の取組を継続していくことが必要である。

学校名 胎内市立築地小学校

1 取組前の課題

本校の児童は保育園から中学校卒業まで学級のメンバーがほとんど変化しない環境にあり、人間関係は安定的であるが、配慮に欠ける言動が時折見られる。そのため、これまで以上に、他者を思いやる心を育み、居心地がいい学校づくりを推進していくことが必要である。

また、教職員は、確かな児童理解や実態把握に基づいて、いじめの認知力や対応力の向上を図っていくことが大切と考える。

2 特に成果が見られた取組の具体（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

(1) 「いじめの未然防止」の取組と成果

① 松の子班活動（異学年交流）の充実

リーダーシップやフォロワーシップを発揮し、互いを思いやる心を育むために、年間をとおして全校縦割り班による活動を行った。顔合わせの時にはソーシャルスキルによる「サイン集めじゃんけん」を活用し、児童相互の関係づくりに努めた。そして、日々の清掃、松の子まつりの出店など、活動を積み重ねた。

1月に行ったメッセージ交換では、4年生が6年生に対して「いつもそうじのときにまとめてくれてありがとう」、3年生が5年生に対して「6年生を送る週間のじゅんぴのとき、手伝ってくれてありがとう」といった記述が見られた。それぞれの学年に応じた役割分担をすることにより、信頼関係を築き、自己有用感を高めることができた。

② 毎学期実施する「思いやりの木」

互いのよさに目を向けることで、他を思いやる心を育むために、毎学期友達にメッセージ等を送る活動を行った。学級毎に大きな木を描いた用紙にメッセージ等を張り付けていく「思いやりの木」として活動を継続した。

1学期は「あいさつの木」として、あいさつができればシールを貼っていった。2学期は「ふわふわ言葉の木」として、友達のよさを積極的に見つけ、付箋に書いて貼っていった。3学期は「ありがとうの木」として、友達への感謝を付箋に書いて貼っていった。

活動の振り返りでは、「友達にありがとうと言われてうれしかった。」「これからもこまっている友達をたすけたい。」といった記述があり、児童は自己肯定感を高めることができた。

③ 考え、議論する小中合同のいじめ見逃しゼロスクール集会

小中学生が互いの意見を出し合いながら新たな価値に気づき、いじめを見逃さない実践力に繋げるために上記集会を設定した。小学校からは5・6年生が参加し、児童会や生徒会を中心に各校でのいじめ見逃しゼロに向けた実践報告を行った。加えて、いじめについて問題提起する生徒会の劇を見て、各自が自分の考えを記述した後、小中学生混じった小グループで劇のどの場面が問題であったかについて話し合い活動を行った。最後に「私の一人一宣言」として一人一人がいじめをしない、見逃さないためにできることをまとめた。児童は「日常的にあ



いさつしたい」「いじめを見たら止める」など、具体的な行動を考えることができた。

④ 外部講師による情報モラル学習の実施

児童が相手を思いやってメディアを利用できるようになるため、インターネット利用アドバイザーの大久保真紀様を講師に、5・6年生を対象とした情報モラル学習を実施した。様々なトラブル事例を基にメディアの望ましい利用について児童に伝えていただいた。

学習を終えて児童は「これからは利用時間を少なくしたい」「ルールを守って使いたい」と感想をもつことができ、インターネット利用時のモラル向上につなげることができた。

このような取組をとおして、児童アンケートでは次のような結果が得られた。

(%)

質問項目	7月	12月
学校は楽しいですか。	96.5	95.2
相手の気持ちを考えた言葉づかいができましたか。	95.4	94.6

2つの質問項目ともに、7月から12月に数値的な伸びは見られなかったが、90%を大きく上回り、高い達成率となった。年間を通じて児童にとって居心地のよい学校、相手を思いやる気持ちの醸成が図られたと考える。

(2) 「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

① 学級経営を充実させるための校内研修の実施

教職員が法令やいじめの構造についての理解を一層深め、学級経営力を高めることが大切であると考え、新潟大学教職大学院准教授、田代孝様を指導者に招き、いじめの未然防止に向けた学級経営について校内研修を行った。いじめ防止対策推進法の理解、いじめの構造「仲裁者」を増やす学級経営、学級での話合いのルール等について、アクティビティーなどを交えながら学ぶことができた。

② ハイパーQ-Uを学級経営に生かすための校内研修の実施

学級担任が学級の状態を的確に分析し、必要な手立てを講じていくことが大切であると考え、新潟清心女子中学・高等学校特別顧問の吉澤克彦様を指導者に招き、Q-Uを生かした学級づくりについて校内研修を実施した。基本的なQ-Uの分析方法、学級集団の状況における教師の役割等について学ぶとともに、今後の学級経営のポイントについて学級ごとに示唆をいただくことができた。

取組の前後で教職員の「正しいいじめ認知のためのチェックシート」の正答率は右表の結果となった。研修をとおして、法令について学び直し、いじめについての見方・考え方を深めることができたためである。そして、いじめを見逃さないことや早期に対応することなど、校内体制の向上につなげることができた。

チェック月	正答率
5月	88.9%
12月	91.5%

3 今後の課題

「いじめの未然防止」の取組では、情報モラル学習及び小中合同いじめ見逃しゼロスクール集会における低・中学年の参加や関与が必要である。

「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」については、今回の校内研修の成果を生かし、毎年計画的・継続的に研修を位置付けていくことが必要である。

学校名 関川村立関川小学校

1 取組前の課題

学校の職員全体が、いじめにつながる要因を早期に発見できる感度を高めていくことが必要である。また、個々の特性や家庭生活で生じるストレスが表面化する児童が複数いる実態であるため、安心して学び生活できる温かい環境の整備と雰囲気醸成、教職員の生徒指導力の向上が喫緊の課題となっている。

2 特に成果が見られた取組の具体

(1) いじめの未然防止」の取組と成果

① 取組

ア 第1回「いじめの未然防止実践研究パイロット事業」研修会

日時：6月15日(水) 15:30～16:40

講師：上越教育大学大学院 高橋 知己 様

内容：SCTアンケート(文章完成法)の実施方法

イ 「SNS等ネットいじめの未然防止講座及び職員研修」

日時：7月13日(水) 14:30～16:40

講師：上越教育大学大学院 寺戸 武志 様

内容：SNS等ネットいじめ防止講座(5, 6年生対象)

SNS等ネットいじめ未然防止研修(教職員対象)

ウ 第2回「いじめの未然防止実践研究パイロット事業」研修会

日時：10月25日(火) 15:50～16:50

講師：上越教育大学大学院 高橋 知己 様

内容：SCTアンケート(文章完成法)アンケートの分析方法

② 成果

ア SCTアンケートにより、児童の潜在的な要素を表出できた例

- ・学歴に対する何らかの先入観やコンプレックスがある。家族の価値観が影響している。
- ・不登校傾向の要素がある。
- ・自分の世界観に入りやすいので、観察が必要である。

SCTアンケートで表出した潜在的な要素を加味しながら、教育相談を行ったり、日々の支援に生かしたりすることで、いじめの未然防止に努めることができた。

イ 研修後の教職員の変容

- ・ 4段階評価で(◎大変有効だった ○まあまあ有効だった △あまり有効でなかった □ 有効でなかった) アンケートを実施した。アンケート項目「いじめの未然防止実践研究パイロット事業のSCTアンケート研修をとおして、いじめにつながる要素発見に役立てることができたか」では、肯定的評価が100%(◎67%、○33%)だった。

児童による「○○さんが、消しゴムとか使わないか心配である」「○○さんが、自分をどう思っているのか心配である」「遊ぶと何かとトラブルになる」等の記述を受け、教職

員が迅速な対応をすることができた。

- ・ 高橋教授に、SCTアンケートを分析していただくことで、児童の潜在的な意識や特性、思いや願い等を深く理解することができ、日々の指導に生かすことができた。

ウ 暴力・いじめ・非行の件数（R3年度とR4年度の比較より）

（件）

	暴力	いじめ	非行
令和3年度（4月～2月）	0	10	0
令和4年度（4月～2月）	0	3	0

「SCTアンケート」の結果を教育活動や日々の児童観察、生徒指導に生かすことで、いじめの未然防止につながり、昨年度よりもいじめの件数が減少した。

(2)「教職員のいじめの認知力や対応力等の向上」の取組と成果

① 取組

ア 「いじめを未然に防ぐためのアンケートの在り方」についての研修の実施

- ・ 上越教育大学大学院教授 高橋知己様を講師にお招きし、SCTアンケート（文章完成法）について、また分析方法について学んだ。

イ 「SNS等ネットいじめ未然防止」についての研修の実施

- ・ 上越教育大学大学院教授 寺戸武志様を講師にお招きし、「ネットにおける児童生徒の現状」や「ネットの長時間使用による影響」また、「ネット上のいじめの理解と対応」「ネットのいじめの防止に向けて」について学んだ。

② 成果

ア 保護者アンケート項目「学校でいじめを受けたという話を聞いた」では、肯定的評価1学期100%、2学期97%であった。残り3%の事案については、対応済みである。

イ SCTアンケートを実施することで、普段接していても分からない・気付にくい児童の潜在的な内面を知ることができた。児童理解が深まることで、些細な変化に気づき、早期発見や対応につながった。また、ストレスや不満を抱えている児童に寄り添った声かけや児童を行うことができた。

3 今後の課題

- (1) 今後も、SCTアンケートを実施し、特に気になる児童には経過観察を継続するとともに、教職員がSCTアンケートを分析できるようにしていく。
- (2) 集団で何かを成し遂げるなどの経験が不足している学年があることが分かった。普段の授業はもちろんのこと、学級活動や学校行事、縦割り班活動をとおして、子どもたちが主体となった活動となるように努めていく。
- (3) 不安や不満を抱えている児童については、今後も継続してスクールカウンセラーと連携しながらケース会議を開いたり、両親との面談を定期的に行ったりしながら、連携して取り組んでいく。